新明解国語辞典

第五版

金田一京助
山田忠雄（主幹）・柴田武・
酒井憲二・倉持保男・山田明雄

新明解国語辞典 第5版

金田一京助
山田忠雄(主幹)　柴田武　酒井憲二
倉持保男　山田明雄

三省堂出版社
世界图书出版公司
北京·上海·西安·广州

新明解国語辞典 第5版
© Sanseido Co., Ltd. 1997.11.

书　　名:新明解国语辞典 第5版
编 著 者:金田一京助　山田忠雄(主幹)　柴田武
　　酒井憲二　倉持保男　山田明雄
责任编辑:雷玉清
出　　版:三省堂出版社
重　　印:世界图书出版公司北京公司
印　　刷:北京新华二厂
发　　行:世界图书出版公司北京公司(北京朝内大街137号,100010)
销　　售:各地新华书店和外文书店
开　　本:787×1092　1/32　印张:49　字数:1170千字
版　　次:1999年1月第5版　2001年1月第2次印刷
印　　数:10001－20000
书　　号:ISBN7-5062-3948-5/H·266
版权登记:图字01-98-1480
定　　价:62.00元
世界图书出版公司北京公司已获授权,在中国大陆独家出版、发行本书。版权所有,侵权必究。

二十一世紀を目前にして（第五版　序）

この辞書の前身である『明解国語辞典』は、金田一京助の発案により、見坊豪紀が主幹として編集したものであった。初版の出たのが昭和十八年（一九四三年）、戦時中のことである。

やがて戦後になって、標準的な学習辞書として大いに迎えられた。ついで、昭和四十七年（一九七二年）、主幹が、山田忠雄に代り、新しい時代にふさわしい内容に一新して、『新明解国語辞典』に生まれ変わった。それからでもすでに二十六年たつ。

『明解国語辞典』から数えれば、すでに半世紀を越えた。その間、途切れることなく版を改め、刷を重ねて、今や刊行部数は千七百万に達した。しばしば「国民的辞書」と言われるのはそのためである。

近年、本辞典の個性豊かな内容が一部の識者に注目され、新聞・雑誌などマスコミで取り上げられるようになった。学習辞書の枠をはずして、教養書として「辞書を読む」新しい層をつかみ、その層も厚くしつつある。

本辞典が個性的であると言われる、その個性は、主幹　山田忠雄の資質から生まれたものである。その主幹をわれわれは昨年（一九九六年）二月に失ってしまった。船頭がいなくなった舟の中にとり残されたわれわれは、どうすべきか茫然とした。同年の秋に第五版を出す予定で進めていた編集作業がストップした。しかし、関係者が相寄って態勢の立て直しを図り、ここに第五版を送ることができた。

『明解国語辞典』が新語の採集に努め、語釈は二行主義の簡潔な表現を採ったのに対して、『新明解国語辞典』は、見出し語をむやみに増やさず、語釈の充実と深化に努めた。

『新明解国語辞典』は、こうした語彙的情報のほかに、「語結合の型」と言われてきた統語的情報を加えて

いることが特色であった。ある語は、必ず、また、好んである語を伴って使われる。そのことを用例のなかで示し、特にゴシックで注意を促してきた。

今回、さらに第二の統語的情報を添えた。これも広い意味での「語結合の型」と言えるものであるが、主な動詞について、共起しうる、いくつもの助詞を示した。「語結合の型」と区別して、これを「基本構文の型」と言う。山田主幹のもとで構想にのぼっていたが、それを今回このような形にまとめた。

われわれ残された者が与えられた短い時間に改めて図ったことは、外来語の充実であった。もともと本書は、世の外来語ラッシュに動ぜず、外来語の採択には慎重な態度をとり続けてきたが、今回この方針を少々見直して、ある程度外来語を追加した。初めて耳にする外来語、あやふやな外来語を確かめるために辞書に当たろうとする人は少なくない。そういう読者の要求にも応えなければならないと考えた。

『明解国語辞典』の時代を第一世代とすれば、『新明解国語辞典』の時代は第二世代である。その世代を背負ってきた主幹が不在になった今、この第五版が第二世代をしめくくる役を果たすことになる。時正に二十世紀の終りである。

二十一世紀は、第三世代の新『新明解国語辞典』を送り出す時である。

一九九七年 九月七日

編集委員会代表　柴田　武

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.co

編集方針

この辞典は、現代の言語生活において最も普通に用いられる日本語に就いて、その多岐にわたる用法を種種の角度から内省・確認し、併せて正確・効果的な使用が可能であることを念じて編集された。

見出し語

一　**採録方針**　いわゆる自明合成語・擬音語は多く省略に従った。また、動詞とその名詞形との間に大きな用法の違いの無いものや、形容詞および いわゆる形容動詞に基づく派生形（―さ・―げ・―がる）も、語釈の末尾に太字で示すのみにとどめ、別掲しなかった。

二　**重要語**　三千四百三十三に＊＊の印を付けた（⇨一五五二ページ）。

三　**字音語の造語成分**　（⇨八〇〇ページ）当該ページの上方一隅に枠で囲み別掲した。

四　**固有名詞**　国名はそのすべてを巻末に付載した。

語釈　単なる文字の説明および堂堂めぐりを極力排し、文の形による語義の解明を大方針とした。

一　**語義の分類**　無意義な細分化を避け、大分類に従った。文脈に即しての意味は、用例の下のパラフレーズによって示した。

二　**語義の配列**　語義は、現代日本語において通常使用されているものを凝視し、頻度の高いものから低いものへ、一般的なものから特殊なものへという方向によることを原則とした。古義・原義で、あとへ回すことに忍びないものは、語原として冒頭に注した。

三　**類義語の弁別**　漢語的表現・古語的表現・老人語・雅語的表現・和語的表現・字音語的表現　などの術語のもとに同義語間の用法の相違を記述した。

右の術語中における〈漢語〉は、狭義における用法に属し、字音語一般とは区別されるものを指す。

四　**補足的説明**　語釈に先立って、語原・位相を示すと共に、語の使用場面などに就いての限定を知らせることに努めた。外来語のスペリングも語原扱いとした。原語の意味を注記したものも少なくない、

例、サイダー[1]〔cidre りんご酒〕…

本義と異なる広義・狭義の用法および転義並びに必要な補足的説明を語釈の末尾に施した。

五　**かぞえ方**　実際の使用例から採集した物の算(ゾ)え方を、かぞえ方欄に示した。なお、「一個・一つ」という算え方については、少数に限って併記・単記して掲げた。因みに、この欄には「一山・二箱・…」など、広い意味の算え方ではあるが、厳密には助数詞とは言えないものをも注記した。

付録　巻末に、外国地名一覧・文法関係諸表・送り仮名の付け方のほか、アクセント一覧などを付載して、利用の便を図った。

細則

見出しの表記と体裁

1 和語・字音語は　ひらがなで表記した。

2 外来語はカタカナで表記した。ただし、慣用久しきに及ぶ約十語は準和語扱いとした。

なお、1は「現代仮名遣い」（昭和六一年七月一日内閣告示）に、2は「外来語の表記」（平成三年六月二八日内閣告示）に従うことを旨とした。

3 あいきどう【合気道】・ねがわくは【願わくは】等における右傍のカタカナ小字は、本行(ギョウ)の1に対応する表音式表記である。

4 一見出しの区分は原則として二区分とした。助詞「の・つ」を介するものは助詞までを上位に扱った。また、促音・撥(ツ)音が新たに添

加される口頭語形は、促音・撥音から以下を下位として扱い、本来の変化形と区別した。例、

そっけ（素っ気の意）　そっけ[ッ]【俗気】

ふんま・える【踏んまえる】（〈踏まえる〉の口頭語形）　ふんば・る【踏(ん)張る】

なお、区分は、現代の言語意識に即して行い、必ずしも語原にまでは さかのぼらない。起原における区分は、語原欄に注した。

5 二字の漢字で表わされる見出しでも、動植物名・固有名詞および借字によるもの（仏教語の音訳や万葉がなによる国名の表記を含む）は区分を設けなかったものが多い。

6 活用語は原則として終止形で掲げ、語幹と語尾に分けられるものは、その間に・を入れた。

見出しの配列

7 五十音順による。同一の かなの中では、清音・濁音・半濁音、また促音・拗(ヨウ)音→直音の順序に従った。

8 ーをもって表わす外来語の長音は、直前の母音がア・イ・ウ・エ・オのいずれであるかによって、それぞれの音を表わす かなに置きかえた位置に配列した。

9 同音語のオーダーは次の順位で配列した。

（1）記号→造語成分→接辞（接頭語・接尾語）→単純語→複合語（語の性質・構成）

（2）助詞→助動詞→感動詞→接続詞→副詞→連体詞→用言（動詞・形容詞）→名詞（代名詞はその直前）（品詞の区分）

（3）カナ→漢字（表記）

（4）外来語→字音語（内部を十の漢字でそろえ、さらに画数順。同画数のものは、康熙(コウキ)字典の順。右に見えない字体は、同画の最初）→和語（語の種類）

（5）ハイシャ　歯医者→拝謝・配車・敗者

カ・エル（代える・変える）→カエ・ル（反る・返る・孵る）のように、上位の音節数の少ないものから多いものへと配列した。（同一品詞に属する同音節数の語の区分）

10 共通の成分で くくられる同音語、および語原の異なる同形の外来語を便宜 ■ ■ で統合し、スペースの倹約を図った。

子見出し

11 同根を統合する範囲は、外来語（梵(ボン)語の音訳を除く）は四音節以上、字音語は複合語見出しに限り、また、和語は三音節以上に限る。

12 複合語や慣用句・ことわざの類における共通部分は ― で略示した（活用語の場合は、語幹までを）。

13 非共通部分は かな見出しを用いず、ただちに正書法を示し、その下にアクセントを掲出した。アクセントの上の小書き ひらがなは訓(ヨミ)みを示し、直下のカタカナは歴史的仮名遣いを示す。

アクセントの指示

14 単語として独立の用法を持つ すべての見出し語に就いてアクセントを示した。見出しの直下、□で囲んで示したアラビア数字がアクセント記号である（⇩付録「アクセント表示について」）。

15 単独の見出しを掲げなかった語のアクセントは、言替えなどをした その所において示すことを原則とした。

歴史的仮名遣いの指示

16 アクセントに続けて、小字・カタカナで歴史的仮名遣いを示した。複合語の場合は区分に従って二行に割り、当該部分だけのカナを示して他は ― で省記した、

例、あいだ[0]ノ【間】　あいちょう[0]ノ【哀調】

見出し語の正書法

17 【　】の中に、『常用漢字表』（昭和五六年一〇月一日内閣告示）に依拠しつつその語の「正書法」を示した（ただし、かな表記を普通とするものの場合は省略）。ここで言う「正書法」とは、漢字かな交じり文中

における　漢字を主体とする表記の、最も標準的な書き表わし方として一般に行われるものを指す。

18 表記が二つ以上有る場合は、正書法欄に掲げないものを、[illegible]欄に古来の慣用・もとの用字・代用字などの別を示しながら掲げた。

19 ローマ字で書くことが普通であるものも、この欄に示した、

例、アイエルオー【ＩＬＯ】

20 学習用の漢字は教科書体活字によって示し、常用漢字表外の字には直上に∧を付けた。二字以上に連続して同じ事を示す場合は（　）で包んで示した。

21 常用漢字表に有っても本表に無い訓みをする場合は、当該の文字の上に≪を付けた。

22 二字以上の漢字を常用するものの中、訓みに問題の有る語に就いて、

（1）熟字の各字が日本語の複合語の各成分と一対一対応を示さないものに就いては、当該部分を（　）で囲み、常用漢字表の付表に掲げられている語などの常用例は正書法欄に（a）、然らざる者は表記欄に（b）示した、

a　あす【明日】……[illegible]　⇩付表

b　きせる……[illegible]　普通、「煙管」と書く。

なお、bの外縁に「漢語表記」「…は義訓」と特に注記した一類（c）が有る。難読性の高いcは、今日　表記一般として万人に求められるものではないが、広汎(ひろ)な読書のためには有用な知識と考え、この欄に関説した。

（2）付表に掲げられている語でも、一対一対応をなすものと認められる語は、他の語と同じように、一字ごとに本書の一般原則を適用した上で、表記欄に　付表にその語例が載っている旨を注記した、

でこぼこ【≪凸≪凹】……[illegible]　⇩付表「凸凹」

ともだち【友≪達】……[illegible]　⇩付表「友達」。「≪達」は借字。

品詞などの指示

23【　】の直下に（かな表記のものは見出し、またはアクセントの直下に）、名詞以外の品詞名を（　）に包んで示した。

24 品詞以外で（　）を用いたものは次のごとくである、

（造語）　造語成分

（接頭）　接頭語　　（接尾）　接尾語

（略）　略語

（参考）　本辞書では　連語　という術語は一切　用いなかった。また、連語にはアクセント表示を行わなかった。

25 名詞・副詞のうち、サ変動詞またはいわゆる形容動詞としての用法を併せ有するものは次のごとく扱った、

|する　名詞のほかにサ変動詞の用法

|に　名詞のほかに連体形に「な」、連用形に「に」の用法

|な　右のうち、一般には連体形の用法だけのもの

|たる　名詞のほかに連体形に「たる」、連用形に「と」の用法

|と　右のうち、一般には連用形の用法だけのもの

|する　名詞のほかにダ活用形容動詞とサ変動詞の用法

|とする　名詞のほかにタルト活用形容動詞とサ変動詞の用法

ただし、右の用法は雅馴(がじゅん)と認められるものに限り、網羅を宗とはしなかった。

26 動詞は活用の種類と自他の区別を示した。ただし、日本語の動詞の自他に就いては問題も多いので、サ変動詞のうち25に関するものは一切しるさなかった。補助動詞は「て」「で」を介するものだけに限り、他は（接尾語的に）などの注記の形で示した、

例、あ・う　[illegible](自五)…　[illegible](接尾語的に)…

27 複合語構成要素としての動詞連用形は利用者の便を図って、動詞連用形の名詞用法と同じ見出しで扱い、以下のように区分した、

例、あそび【遊び】Ⅰ……Ⅱ（造語）動詞「遊ぶ」の連用形。……

また、動詞「遊ぶ」の項の末尾からは、名詞用法の見出しを参照させた、

例、あそ・ぶ【遊ぶ】……（Ⅱ→遊び）

28 助詞は、格助詞・副助詞・接続助詞・終助詞の四種に分けた。

動詞を述語とする文の基本文型

29 文の意味的的確な理解を図るとともに、表現面への応用に役立つことを意図し、重要度の高い動詞について、それを述語とする文の格助詞を中心とする基本文型を記載した。すなわち、重要語の指示＊＊を付した動詞項目約一千語について、これら動詞を述語とする文を構成する上で必須の要素である　名詞(句)＋格助詞　を一定の方式に従って〈　〉に入れ、基本文型を示した。見出し語全体に共通の場合は自他の別・活用の種類を示した直後に、そうでない場合は語釈の区分を示す㊀、㊁等の直後に掲げた。また、二つの形式がある場合は〈／〉によって示した、

例、（他五）〈なにヲ／〉…　㊁〈だれヲ／だれニ／〉…

（―は該当する動詞を示す）

記載の方針は概ね以下の通りである。

(1)文構成上必須の要素と考えられる格助詞をヲ・ニ・デ・ト・カラ・マデに限った。

(2)動作・作用や存在、性質・状態等の主体を表わす「ガ」（「鳥ガ鳴く」「犬ガいる」「空ガ青い」）は動詞を述語とするすべての文に必須の要素であることから敢(ア)えて示さなかった。また、動作性の意味を持つ動詞を述語とする文に必須の要素である、動作・作用の行われる場所を表わす「デ」（「学校デ勉強する」）も同じ理由で示さなかった。従って、本辞書に示したデは方法・手段等を表わす用法（「電車デ行く」「木デ作る」）に限られる。

なお、動作・作用を向ける対象を表わすヲ（「紙ヲ切る」）と移動性の動作の経路や通過点を表わすヲ（「空ヲ飛ぶ」）とを形式的に区別することはしなかった。

(3)格助詞に前接する名詞(句)はその意味の特徴から　だれ・なに・どこ・なんだ　の四種に区分した、

だれ……人または人に準ずるものを表わす名詞(句)

例、〈だれト―〉（「結婚する」の項）

なに……前記の　だれ　に該当しない事物・事柄・時などを表わす名詞(句)

例、〈なにニなにヲ―〉（「書く」の項）

どこ……場所・位置や物の部分などを表わす名詞(句)

例、〈どこニ―〉（「いる」の項）

なんだ…発言・思考・意志・感情などの内容を表わす句

例、〈なんだト―〉（「考える」の項）

(4)移動性動作を表わす動詞を述語とする文における移動の方向を表わす「ヘ」（「北へ向かう」）を必須の要素とする文では、同時に到達点を表わす「ニ」（「北ニ向かう」）も必須の要素となる場合が大多数を占めるので、本辞書ではすべて〈どこニ―〉の形式によって代表させた。

(5)名詞(句)の区分のうち、　なんだ　はすべて〈なんだト―〉の形式でのみ示した。これによって、動作を向ける相手などを示す〈だれト―〉などの「ト」との文法的機能の違いが判別される。

(6)文脈上の制約などにより、必ずしも必須の要素とはならない用

法のあるものについてはそれを（　）にくくって示した、

例、〈（なに）デ（…）〉（「沸く」の項）

位相などの指示

30 次の五種のほかは、〔野球で〕〔すもうで〕〔仏教で〕〔数学で〕〔……方言〕のごとく具体的に示した、

〔雅〕　雅語。日常のくだけた会話や文章には常用されず、短歌・俳句などの詩的表現や文語文に多く用いられるヤマトコトバ。

〔古〕　古語。漢文訓読系統の古風な文章語としてしか用いられないものや、江戸時代までは日常語として行われた字音語など。

〔口頭〕　口頭語。ごく普通の話し言葉。やや崩れた形を含む。

〔俗〕　俗語。話し言葉のうち、やや下品に傾くもの（多数に、適用）。

〔卑〕　卑語。公衆の面前では遠慮すべき表現（極めて少数に適用）。

語釈の表記

31 常用漢字をフルに使い、かつ独自の方針で表記を統一した、

例、㈠ 哺(ほ)乳類　などをルビ無しで頻繁に用いた。

㈡ 文中における動植物名は多くカタカナ書きにした。

㈢ 外字および難読字には（　）内に、カタカナを用い二行で訓みを示した。

32 用例の中、結合や用法などが局限されるものは、いちいち注記する代りに必要部分を太字で示した、

例、じまい「見ず**ー**」　かまう「行っても**構わない**」

かつて「未だ**ー無かった経験**」

以上は、常に否定表現を伴うことを示す。

いる ㈡「見て**ー**人・泣いて**ー**か笑って**ー**か…」

右は、必ず「て」を伴って用いることを示す。

なお、直接引用については、原典のかなづかい及び用字に極力従うことを原則とし、難読の語には適宜　訓みを施した。

33 取り扱いに問題のある送り仮名に就いて、

史的に見れば、送り仮名は、訓みの確認のため漢字の傍らに随時小書きしたもので、一貫した理法など由来　存しない。

然しながら、規範を生命とする辞書の場合、全くの無方針を避けるとすると、結局　常識の範囲内で多く送るもの（a）と、比較的少なく送るもの（b）との別が有ることを指摘した上で、そのうち、多く送る部分については（）を以て示すことが親切であると考えた。

以下、「送り仮名の付け方」（『一五四四ページ』）との関連について示す。

(1) a が「送り仮名の付け方」の本則と一致するものは注記を施さない。

(2) b が本則と一致するものは、語釈の末尾にその旨注記する、

【汚(よご)れる】……本表=「汚い」　【下(さが)る】……本表=「下る」

【伴(ともな)う】……本表=「伴う」　【上(あが)る】……本表=「上る」

なお、本表とは、常用漢字表の本表を指す。

(3) a が「送り仮名の付け方」の例外と一致する場合は、その旨注記する、

【幸(さい)わい】……例外=「幸い」　【幸(さち)せ】……例外=「幸せ」

(4) 複合の名詞のうち慣用として送り仮名を付けない、とされている語は、その趣旨を生かし b のみを示した、

【合間】【並木】【巻紙】【字引】【乗組員】

これに基づき、例えば「家並・町並・人並・十人並」などにも「並木」と同じ方法を適用した。

(5) 複合語の上位が　かな書きの場合、下位の表記は多く a に従った。

(6) 常用漢字以外を使用する見出しに就いても上記を準用した。

常用漢字表「付表」

あす　明日
あずき　小豆
あま　海女
いおう　硫黄
いくじ　意気地
いちげんこじ　一言居士
いなか　田舎
いぶき　息吹
うなばら　海原
うば　乳母
うわき　浮気
うわつく　浮つく
えがお　笑顔
おかあさん　お母さん
おじ　叔父（伯父）
おとうさん　お父さん
おとな　大人
おとめ　乙女
おば　叔母（伯母）
おまわりさん　お巡りさん
おみき　お神酒
おもや　母屋（母家）
かぐら　神楽
かし　河岸

かぜ　風邪
かな　仮名
かや　蚊帳
かわせ　為替
かわら　河原（川原）
きのう　昨日
きょう　今日
くだもの　果物
くろうと　玄人
けさ　今朝
けしき　景色
ここち　心地
ことし　今年
さおとめ　早乙女
ざこ　雑魚
さじき　桟敷
さしつかえる　差し支える
さつきばれ　五月晴れ
さなえ　早苗
さみだれ　五月雨
しぐれ　時雨
しない　竹刀
しばふ　芝生
しみず　清水
しゃみせん　三味線
じゃり　砂利
じゅず　数珠
じょうず　上手
しらが　白髪

しろうと　素人
しわす　師走
（「しはす」とも言う。）
すきや　数寄屋（数奇屋）
すもう　相撲
ぞうり　草履
だし　山車
たち　太刀
たちのく　立ち退く
たなばた　七夕
たび　足袋
ちご　稚児
ついたち　一日
つきやま　築山
つゆ　梅雨
でこぼこ　凸凹
てつだう　手伝う
てんません　伝馬船
とあみ　投網
とえはたえ　十重二十重
どきょう　読経
とけい　時計
ともだち　友達
なこうど　仲人
なごり　名残
なだれ　雪崩
にいさん　兄さん
ねえさん　姉さん
のら　野良

のりと　祝詞
はかせ　博士
はたち　二十（二十歳）
はつか　二十日
はとば　波止場
ひとり　一人
ひより　日和
ふたり　二人
ふつか　二日
ふぶき　吹雪
へた　下手
へや　部屋
まいご　迷子
まっか　真っ赤
まっさお　真っ青
みやげ　土産
むすこ　息子
めがね　眼鏡
もさ　猛者
もみじ　紅葉
もめん　木綿
もより　最寄り
やおちょう　八百長
やおや　八百屋
やまと＝　大和＝（大和絵 大和魂等）
ゆかた　浴衣
ゆくえ　行方
よせ　寄席
わこうど　若人

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

部首一覽

一 一画
丨 丶 ノ 乙・乚 亅 二 亠 人(亻)・儿 入・入 八 冂 冖 冫 几・凡 凵 刀(刂) 力 勹 匕 匚 十 卜 卩・巳

厂 厶 又 ㇇ 口 囗画 口 土 士 夂 夊 夕 大 女 子 宀 寸 小・⺌ 尢(兀) 尸 屮 山 川 工 己 巾

干 幺 广 廴 廾 弋 弓 彐・彑 彡 彳 心 戈 戶・戸 手(扌) 支 攴 文 斗 斤

方 无 日 曰 月 木 欠 止 歹 殳 毋 比 毛 氏 气 水(氵・氷) 火(灬) 爪・爫・爪 父 爻 爿 片 牙 牛・牜 犬(犭) 玄 玉(王) 瓜 瓦 甘 生 用 田 疋・疒 目 矛 矢 石 示(礻) 禾 穴 立 竹 米 糸 缶 网(罒) 羊・羊 羽・羽 老(耂) 而 耒・耒 耳 肉(月) 臣 自 至 臼 舌 舟 艮 色 艸(艹) 虍 虫 血 行 衣(衤) 襾・西

見 角 言 谷 豆 豕 豸 貝 赤 走 足(⻊) 身 車 辛 辰 辵・辶・辶 邑(阝)(右) 酉 釆 里 臣 釈 金 長(镸) 門 阜(阝)(左) 隶 隹 雨 青 非 面 革 韋 韭 音 頁 風 飛 食・飠(飠) 首 香 馬 骨 高 髟 鬥 鬯 鬲 鬼 魚 鳥 鹵 鹿 麥 麻・麻 黃(黃) 黍 黑(黑) 黹 黽 鼎 鼓 鼠 鼻・鼻 齊 齒(齒) 龍 龜 龠

1【一―丨丶ノ乙亅】2【二―十】

漢字索引――部首引――

一、本辞典の見出しにおける漢字使用の語がすべてこの索引によって読めるように配慮した。すなわち、各字ごとに代表音訓（音は片仮名、訓は平仮名）を掲げ、必要に応じて熟語・熟字及び難読語の訓（•）みを示した。

二、常用漢字は〔一〕で、それ以外は（一）で示した。（△は、常用漢字表にない音訓）

三、本辞典不載の音訓・用例をも併せ掲げ、幅広い要求に応（こた）えるように努めた（字音語・外来語は片仮名、和語は平仮名）。なお、一部新訓をも案出した。

四、その字・語の「訓み」として慣行久しき者の中、もと他字の字音に属する向きは平仮名で表記した。

五、配列は康熙（コウキ）字典の順（部首順・画数順）を宗とした。右に当嵌（ハマ）らぬ新字体は、最も妥当と考えられる部首から引けるようにし、時には新部首をも設けた。

1【一】部

〔丈〕ジョウ たけ　万丈（バンジョウ）

〔三〕サン（ミ）（ミッ）　丈夫（ジョウブ）　三進（ミッ）も三進（ミッ）も

〔上〕ジョウ（ショウ）（うえ）（うわ）　上枝（ウワエダ）　上手（ウワテ）　上気（ジョウキ）　逆上（ギャクジョウ）せる　下枝（シたえだ）　下手（シたて）

〔下〕カ（ゲ）（した）（しも）（もと）（さげ）（くだ）（おろ）（くだる）（おりる）

〔与〕ヨ（あたえる）（くみする）　与する

〔不〕フ（ブ）　不知火（しらぬい）　不如帰（ほととぎす）　不拘（かまわず）　不見転（みずてん）　不味（まずい）　不知（しらず）　不知不識（しらずしらず）

〔丁〕テイ（チョウ）　丁度（ちょうど）　丁髷（まげ）　丁稚（でっち）　丁幾（チョウキ）　拉丁（ラテン）

〔七〕シチ（なな）（なな）　七日（なのか）　七十（路）（ななそじ）　七五三縄（しめなわ）　七月（しちがつ）　七夕（たなばた）　万年青（おもと）

〔万〕萬（バン（マン））（よろず）

1【丨】部

〔中〕チュウ（△うち）（△あたる）

〔丰〕ホウ（かたち）

〔巨〕キョ（コ）（おおきい）

〔串〕セン（くし）

〔百〕→白部1画

〔更〕→口部3画

〔来〕→木部3画

〔求〕→水部2画

〔歪〕→止部5画

〔憂〕→心部11画

1【丶】部

〔丑〕チュウ

〔且〕ショ（かつ）（しばらく）

〔世〕セ（よ）

〔丘〕キュウ（おか）　比丘（ビク）

〔丙〕ヘイ（ひのえ）

〔丞〕→木部1画

〔正〕→止部1画

〔丞〕ジョウ（すけ）　丞相（ジョウショウ）

〔両〕リョウ（△もろ）　両個（フタ）

〔再〕→冂部4画

〔主〕シュ（△ジュ）（ぬし）（おも）（△あるじ）　法主（ホッス）　坊主（ボウズ）

〔丹〕タン（△に）　牡丹餅（ぼたもち）　雲丹（ウニ）

〔丸〕ガン（まる）（△まる）（△たま）

〔之〕→ノ部3画

〔乗〕ジョウ（のる）（のせる）

〔卑〕→十部7画

〔睾〕→目部9画

〔乗〕→十部5画

〔乗〕ジョウ（のる）（のせる）

〔乗〕→十部7画

〔乗〕→目部9画

1【ノ】部

〔丹〕タン（ノ）（ダイ）　天丹（テンタン）

〔永〕→水部1画

〔良〕→艮部1画

〔乃〕ダイ（ナイ）（ノ）　木乃伊（ミイラ）

〔久〕キュウ（ひさしい）

〔及〕→又部2画

〔千〕→十部1画

〔之〕シ（ゆき）　加之（しかのみ）

〔匁〕→勹部2画

〔升〕→十部2画

〔屯〕→屯部1画

〔乍〕ながら　乍ら　乍ら古止点（ケンとてん）

〔乎〕か　乎ら　乎ら古止点（ケンとてん）

〔乏〕ボウ（とぼしい）

〔丘〕→一部4画

〔年〕→干部3画

〔乖〕カイ（そむく）

〔垂〕→土部5画

〔乗〕ジョウ（のる）（のせる）

〔卑〕→十部7画

〔睾〕→目部9画

1【乙】部

〔乙〕オツ（△おのと）　乙姫（おとひめ）　乙女（おとめ）　乙張（ぬりはり）　甲乙（かっぱ）

〔九〕キュウ（ここの（つ））　九十九折（つづらおり）　九十九髪（つくもがみ）

〔乞〕コツ（キツ（こう））　乞食（ほうとう）　乞児（こじき）　乞巧奠（きこうでん）

〔也〕ヤ（なり）

〔乱〕ラン（みだれる）（みだす）　胡乱（うろん）

〔乳〕ニュウ（ち（ちち））　乳母（おんば）　乳人（女）（めのと）

〔亂〕→肉部5画

〔乾〕カン（ケン）（かわく）（△かわかす）（△かわいい）　乾風（からかぜ）　乾鮭（からざけ）　乾反（ひる）　乾葉（ずる）　乾酪（チーズ）

1【亅】部

〔了〕リョウ（△おわる）

〔予〕ヨ（△あらかじめ）（△かねて）（△われ）（「われ」以外の「予」は、豫）

〔事〕ジ（ズ）（△こと）（△つかえる）

2【二】部

〔二〕ニ（△ふた（つ））　二日（ふつか）　二十歳（はたち）　二十日（はつか）　二合半（ごうなか）　二進（ニッ）も三進（ニッ）も

〔云〕ウン（いう）　云云（ウンウンしかじか）　云爾（しかいう）

〔互〕ゴ（たがい）（△たがいに）

〔五〕ゴ（いつ（つ））　五月（ごがつ）　五加（木）（うこぎ）　五百（いおとや）　五月蠅（うるさい）　五月雨（さみだれ）　五十鈴（いすず）　五倍子（しょ）　五十（路）（いそじ）　天井（テンジョウ）

〔井〕セイ（ショウ）

〔亘〕コウ（わたる）

〔些〕サ（いささか）（すこし）（も）

〔亜〕亞（アつぐ）

2【亠】部

〔亡〕ボウ（モウ）（△ほろびる）（△なくす）

〔亢〕コウ（△たかい）（△ほろびる）（△たかぶる）

〔交〕コウ（まじわる）（まじえる）（まじる）（まじる）（かう）（かわす）（△こもごも）

〔亥〕ガイ　筋交（すじかい）

〔亦〕エキ（ヤク）　出交（でかわす）

〔亨〕コウ（とおる）

〔享〕キョウ（△うける）（△キョウ）（△キン）

〔京〕キョウ（△きょう）（△やこ）

〔夜〕ヤ（よる）　夜合樹（ねむのき）　十六夜（いざよい）　終夜（よもすがら）　昨夜（サクヤ）

〔卒〕→十部6画

【亭】テイ△チン △あずまや
(亮)リョウ すけ
【哀】↓口部6画
【畝】↓田部5画
【商】↓口部8画

2 【人(亻)部】

【人】ジン・ニン ひと　海・人(匚)草(まくり)　大人(タイジン・ダイニン・うし・おとな)　玄人(くろうと)　美人局(つつもたせ)　一人(イチニン・ひとり)　素人(しろうと)　仲人(チュウニン・なこうど)　若人(わこうど・わかうど)　海・(漁)人(あま)　防人(さきもり)　旅人(たびびと・たびうど・たびと)
2
【仁】ジン・ニ△ニン △ひと　親仁(おやじ)　海・仁(人)草(まくり)
(仄)ソク ほの(か)
(仆)フ たおれる
(仇)キュウ あだ
【今】コン・キン いま　今宵(こよい)　今日(コンニチ・きょう)　今朝(けさ)　今際(いまわ)　今・年(兹)(ことし)
【介】カイ △すけ△たすける
(仍)ジョウ よって・よりて・すなわち
【仏】佛 ブツ ほとけ　仏掌薯(つくねいも)
(什)ジュウ　和仏(フツワ)　大仏(ダイブツ・おさらぎ)
【化】カ・ケ ばける　時化(しけ)
【内】↓冂部2画
3
(仔)シ こ
【仕】シ・ジ つかえる△つかまつる
【他】タ △ほか△あだ△ひと　他所(よそ)　他人事(ひとごと)
(仗)ジョウ よる・つえ
【付】フ つける・つく△つけたり　付子(ブシ・ブス)
【仙】セン　仙人掌(サボテン)
(仝)ドウ おなじ　仝上(ドウジョウ)
(仞)ジン ひろ
【代】ダイ・タイ かわる・かえる・よ・しろ　月代(さかやき)
【令】レイ △リョウ　仮令(たとい・たとえ)　縦令(たとい)
【以】イ △もって　以為(おもえらく)　所以(ゆえん)
4
【仰】ギョウ・コウ あおぐ　仰せ(おおせ)　仰(有)る(おっしゃる)　仰反る(のけぞる)
【仲】チュウ なか　仲人(チュウニン・なこうど)
【件】ケン △くだり　件の如し(くだんのごとし)
【任】ニン、まかせる・まかす △まま△まにまに
【企】キ くわだてる△たくらむ
(伉)コウ ならぶ　伉儷(コウレイ)
(伊)イ これ　伊達(だて)　木乃伊(ミイラ)
(伍)ゴ
(伎)ギ わざ　歌舞伎(かぶき)
【伏】フク△ブク ふす
【伐】バツ △きる　薪伐(たきぎこり)
【休】キュウ やすむ△やむ
【仮】假 カ・ケ かり　仮令(たとい・たとえ)　仮名(カメイ・かな)
(伜)(倅の異体字)
【伝】傳 デン△テン、つたう・つたえる△つて　伝手(つて)　手伝う(てつだう)　言伝(ことづて)
【会】會 カイ・エ あう　出会す(でくわす)　直会(なおらい)
5
【伯】ハク　伯父(おじ)　伯母(おば)
【伴】ハン・バン ともなう△つれ△とも　伴天連(バテレン)
(伶)レイ　伶人(レイジン)
【伸】シン のびる・のばす△のる △のす　欠伸(あくび)
【伺】シ うかがう
【似】ジ にる　真似(まね)　似(而)非(えせ)
(伽)カ・ガ とぎ　伽羅蕗(キャラぶき)
(佃)デン つくだ
【但】△タン ただ(し)　但馬(たじま)　但木(ただき)
(佇)チョ たたずむ　佇居(たたずまい)
【位】イ くらい　三位(サンミ)
【低】テイ ひくい・ひくめる
【住】ジュウ すむ　住居(ジュウキョ・すまい)　住処(すみか)
【佐】サ △たすける△すけ
(佑)ユウ たすける
【体】體 タイ・テイ からだ
【何】カ なに・なん△いずれ △どの△どれ　何時(なんじ・いつ・なんどき)　何方(いずかた・どなた・どちら・どっち)　何処(いずこ・どこ)　何故(なにゆえ・なぜ)　如何(いかが・いかに)　奈・(如)何(いかん)　幾何(きか・いくばく)
【余】ヨ、あまる △われ　余波(ヨハ・なごり)　余所(よそ)　零余子(むかご)　(「あまる」の正字は、餘)
(佚)イツ
【作】サク・サ つくる△なす　作麼生(ソモサン)
(佝)ク　佝僂(せむし)
(佞)ネイ おもねる・よこしま
【含】↓口部4画
6
(佩)ハイ はく・おびる
(佯)ヨウ いつわる
【佳】カ△ケイ △よい
【併】倂 ヘイ、あわせる △しかし(ながら)
(佻)チョウ かろがろしい
【使】シ つかう
(侃)カン
(侈)シ おごる
【例】レイ たとえる△ためし
【侍】ジ さむらい△はべる　内侍(ナイシ)
(侏)シュ　侏儒(シュジュ)
(侘)タ わびる　侘傺(タテイ)
【供】キョウ・ク△グ そなえる・とも
【依】イ・エ △よる
【価】價 カ△ケ あたい
【侮】侮 ブ あなどる
【舎】シャ △や△やどる　舎人(とねり)　学舎(ガクシャ・まなびや)　田舎(いなか)
【命】↓口部5画
7
【侯】コウ
(侶)リョ とも
【侵】シン おかす
【便】ベン・ビン たより△たずき
【係】ケイ かかる・かかり
【促】ソク うながす　偓促(アクセク)
(俄)ガ にわか
【俊】シュン △とし△すぐれる
(俎)ソ まないた
【俗】ゾク△ショク △ならわし
(俘)フ とりこ
(俚)リ ひなびる
【保】ホ△ホウ たもつ△もつ
(俟)シ まつ
(侠)キョウ おとこだて　御侠(おキャン)
【信】シン △のぶ　信濃(しなの)　信・田(太)(しのだ)　信天翁(あほうどり)　風信子(ヒヤシンス)
(俤)おもかげ
(俣)また　水俣(みなまた)
(俥)くるま
8
(俯)フ うつむく・うつぶせる
(倶)グ・ク ともに
(俳)ハイ
(俵)ヒョウ たわら
【俸】△ホウ △おきて
(俺)エン おれ　俺等(おれら・おいら)
(倅)サイ せがれ
【修】シュウ・シュ おさめる　御修法(みシオ)
(倆)リョウ わざ
【倉】ソウ くら　校倉(あぜくら)
【個】コ△カ △ひとつ
【倍】バイ △ます　安倍川(あべかわ)　五倍子(ふし)
【候】コウ、そうろう △うかがう△きざし
【倒】トウ たおれる・たおす
(倖)コウ さいわい・しあわせ
(倚)イ (かた)よる
【借】シャク△シャ かりる
(倣)ホウ ならう
【値】チ ね・あたい△あう
(倥)コウ　倥偬(コウソウ)
(倦)ケン うむ・ものうい・だるい　倦んず(うんず)　待倦む(まちあぐむ)
(倨)キョ おごる
(倪)ゲイ にらむ
【倫】リン △たぐい△みち
(倭)ワ やまと　倭文(しず)
【倹】儉 ケン △つましい
9
(偃)エン ふす・やめる
(偈)ゲ
【偏】ヘン かたよる△ひとえに
(偕)カイ ともに
(偖)シャ さて
(做)サ なす
【停】テイ △とどまる△とめる
【健】ケン すこやか　健気(けなげ)
(偬)ソウ
(偲)サイ しのぶ
【側】ソク、かわ△かたわら △そば(だてる)　側見(わきみ)
【偵】テイ △うかがう
【偶】グウ △たまたま　木・(土)偶(でく)
(偸)チュウ・トウ ひそかに・ぬすむ
(偓)アク　偓促(アクセク)
【偽】僞 ギ いつわる・にせ
10
(傀)カイ　傀儡(子)(くぐつ)
(傅)フ かしずく・めのと
【傍】ボウ かたわら△そば△かたえ　傍目(はため)　傍見(わきみ)　傍輩(ホウバイ)
【傘】サン かさ△からかさ
【備】ビ、そなえる、そなわる△つぶさに　備後(ビンゴ)
【偉】イ えらい
11
【催】サイ もよおす　催合(もやい)　雨催(あまもよい)
(傭)ヨウ やとう
(傲)ゴウ おごる
【債】サイ △かり△おいめ
【傷】ショウ、きず・いたむ △きずつける　火・(熱)傷(やけど)　重傷(ジュウショウ・おもで)

2【入(亻)・儿・入・八・冂・冖・冫・几・凵・力(刂)】

【傾】ケイ、かたむく・かたむける△かしぐ△かたげる
(僂)ル 佝・(傴)僂 クル せむし
(僅)キン わずか
【働】ドウ はたらく
【僧】ソウ 売僧 マイス
【傑】ケツ △すぐれる
(僉)→内部8画
12【像】ゾウ 像 △かたち
(僑)キョウ
【僕】ボク △しもべ△やつがれ
【僚】リョウ △とも
(僥)ギョウ 僥倖 ギョウコウ
(僭)セン おかす
13(僻)ヘキ かたよる・ひがむ
【儀】ギ △のり△よそおい
【億】オク 億劫 オックウ
【舗】ホ 鋪 △みせ△しく 老舗 ロウホ しにせ
(儚)ボウ はかない・はかなむ
14【儒】ジュ
(儘)ジン まま
15【償】ショウ つぐなう
(儡)ライ でく 傀儡(子) くぐつ
【優】ユウ、やさしい・すぐれる△まさる 優曇華 ウドンゲ 優形 やさがた
16(儲)チョ もうける
19(儷)レイ ならぶ 伉儷 コウレイ
(儺)ナ 追儺 ツイナ
20(儼)ゲン おごそか

2【儿部】

(兀)コツ はげる
(允)イン、ゆるす・まことに・じょう
【元】ゲン・ガン もと△はじめ
【兄】ケイ・キョウ あに 兄様 にいさま にいさん 兄子 せこ 兄弟 キョウダイ はらから 哥兄 あに 従兄弟 いとこ
【兆】チョウ きざし・きざす
(兇)キョウ わるもの
【先】セン さき△まず 先斗 ポント
【光】コウ ひかり・ひかる 竹光 たけみつ
【充】ジュウ あてる△みたす
【克】コク △かつ
(兌)ダ ひきかえる
【児】ジ・ニ 兒 △こ△ちご 兵児帯 へこおび 乞児 かたい 掏児 すり 加答児 カタル
(兎)ト うさぎ・う 兎角 とかく とにかく 兎唇 いぐち
【免】メン、まぬかれる 兔 △ゆるす
【党】トウ 黨 △なかま
(兜)トウ かぶと
(兢)キョウ おそれる

2【入部】

【入】ニュウ△ジュ いる・はいる△しむ 入魂 ジュコン ニュウコン 入用 いりよう ニュウヨウ 入声 ニッショウ ニッセイ 入唐 ニットウ 入貢 ニュウコウ いり 一入 ひとしお
【全】ゼン△セン まったく

2【八部】

【八】ハチ や(つ)・やっつ 八日 ようか 八幡船 バハンセン 十八番 ジュウハチバン おはこ
【公】コウ△ク おおやけ 公孫樹 コウソンジュ いちょう 公達 きんだち 公魚 わかさぎ 蒲公英 たんぽぽ 郭公 カッコウ ほととぎす
【六】ロク△リク む(つ)・むっつ 六日 むいか むゆか 六十(路) むそ むそぢ
【分】ブン・フン・ブ わける・わかる 野分 のわき
【共】キョウ とも
【兵】ヘイ・ヒョウ △つわもの 兵児帯 へこおび 飲兵衛 のんべえ
(其)キ・ゴ そ(の)・そ(れ) 其処 そこ 其方 そちら・そなた そのほう 其奴 そやつ そいつ
【具】グ、△そなえる 具 △つぶさに 香具師 ヤシ
【典】テン △のり 典侍 すけ
(冀)キ こいねがう
【興】→臼部9画

2【冂部】

【円】エン、まるい 圓 △まろやか△つぶら 円か まどか
【内】ナイ・ダイ うち 河内 かわち こうち
【冊】サツ・サク 冊子 サッシ ソウシ
【再】サイ ふたたび 再来年 サライネン 再従兄弟 はとこ
【同】ドウ おなじ 同士 ドウシ ドチ 同胞 ドウホウ・ドウ はらから
【周】→口部5画
(岡)→山部5画
(冑)チュウ かぶと・よろい

2【冖部】

【冗】ジョウ △むだ
【写】シャ 寫 うつす
【冠】カン かんむり△とさか 冠木門 かぶきもん 冠者 カンジャ カジャ 鶏冠 とさか
【軍】→車部2画
(冤)エン
(冥)メイ・ミョウ くらい
(冪)ベキ

2【冫部】

【冬】トウ ふゆ 忍冬 ニンドウ すいかずら
【次】ジ・シ つぎ・つぐ 月次 つきなみ
(冴)ゴ 冱 さえる
(冲)(冲と同字)
(冶)ヤ いる 刀鍛冶 かたなかじ
【冷】レイ△リョウ つめたい・ひえる・さめる 冷冷 ひやひや ひえびえ
(冽)レツ つめたい
(凄)セイ すごい・すさまじい
【准】ジュン △なぞらえる
(凋)チョウ しぼむ
(凌)リョウ しのぐ 凌霄花 のうぜんかずら
【凍】トウ、こおる・こごえる△いてる 凍豆腐 しみドウフ
(馮)ヒョウ かちわたり・たのむ
(凜)リン りりしい
【凝】ギョウ こる・こらす 煮凝 にこごり

2【几部】

(几)キ つくえ・おしまずき
【凡】ボン・ハン △およそ△すべて 大凡 おおよそ
【処】ショ 處 △ところ△か 何処 いずこ どこ 止・(留)処 とめど
(凧)たこ・いか(のぼり)
(凪)なぐ・なぎ
(凩)こがらし
(夙)→夕部3画
(凭)ヒョウ もたれる・よる
(凰)オウ 鳳凰 ホウオウ ●
(凱)ガイ かちどき
(鳳)→鳥部3画

2【凵部】

(凶)キョウ △わるい△まが
【凸】トツ △なかだか
【凹】オウ、△へこむ △くぼむ△なかびく 凸凹 でこぼこ
【出】シュツ でる・だす△いづ 出坐 いでまし 出汁 だし 出納 スイトウ 出御 シュツギョ いでまし 出雲 いずも
(函)カン はこ
【画】ガ・カク 畫 △え△えがく 画家 ガカ えかき

2【刀(刂)部】

【刀】トウ かたな 刀自 とじ 長刀 なぎなた 竹刀 チクトウ しない 太刀 たち 大刀 ダイトウ たち 剃刀 かみそり 秋刀魚 さんま 馬刀貝 まてがい
1【刃】ジン△ニン 刄 は△やいば
2【切】セツ・サイ きる△しきり(に) 切符 きっぷ
【刈】△カイ かる
3【刊】カン △けずる
4(刎)フン はねる
【刑】ケイ△ギョウ △つみする
【列】レツ △ならぶ△つらねる 虎列剌 コレラ
5【判】ハン・バン △わかる 判官 ハンガン ホウガン
【別】ベツ、わかれる △わき(て)△わけ(て)
【利】リ きく 利鎌 とがま 足利 あしかが
6(刮)カツ けずる 刮目 カツモク
【到】トウ △いたる
(刳)コ えぐる・くる
【制】セイ △おさえる
【刷】サツ する△かいつくろう 刷・毛(子) はけ
【券】ケン △てがた
(刹)サツ・セツ てら
【刺】シ△セキ さす△とげ△いが△ばら 刺草 いらくさ 刺虫 いらむし 刺青 シセイ いれずみ 肉刺 まめ 栗刺 いが
7【刻】コク きざむ
(剃)テイ する・そる 剃刀 かみそり
【則】ソク、△のっとる △すなわち△のり
【削】サク けずる△そぐ
(剋)コク かつ
(剌)ラツ からい 剌麻 ラマ 虎列剌 コレラ
【前】ゼン△セン まえ△さき 車前草 おおばこ
8(剔)テキ えぐる
【剖】ボウ △ひらく
【剛】ゴウ△コウ △こわい△かたい
(剝)ハク、はぐ・むく・むくれる・すく 塩剝 エンボツ
【剣】ケン 劍 つるぎ
【剤】ザイ 劑 まぜる
9【剰】ジョウ、△あまる 剩 △あまつさえ
(剪)セン つむ・はさむ
【副】フク △そえる
10【割】カツ、わる・わり・われる・さく

割賦（カップ・わっぷ）
（剴）ガイ
〔創〕ソウ、△はじめる △きず △つくる
11（剽）ヒョウ
12（劃）カク くぎる
（劄）サツ
13〔劇〕ゲキ △はげしい
（劈）ヘキ さく
23（釁）→酉部18画

2【力 部】

〔力〕リョク・リキ ちから △つとめる
〔功〕コウ・ク △いさお
〔加〕カ くわえる 加之（しかのみならず） 加答児（カタル） 五加（木）（うこぎ）
〔劣〕レツ おとる
〔助〕ジョ たすける・すけ △すける
〔努〕ド つとめる △ゆめ 努努（ゆめゆめ）
（劫）ゴウ・コウ おびやかす 億劫（オックウ）
〔労〕勞 ロウ、△いたわる △いたわしい △いたつき △はたらく
〔励〕勵 レイ はげむ
〔効〕效 コウ、きく △ききめ △かい
（劾）ガイ △しらべただす
（勁）ケイ つよい
（勃）ボツ おこる
（勅）敕 チョク △みことのり
〔勇〕ユウ いさむ △けなげ
〔勉〕勉 ベン、△つとめる △つとむ
（勒）ロク きざむ 勒大
〔動〕ドウ、うごく △はたらく △ややもすれば
〔勘〕カン △かんがえる
〔務〕ム つとめる 各務（かがみ）
〔勝〕ショウ かつ・まさる △すぐれる
〔募〕ボ つのる
〔勤〕勤 キン、つとめる △いそしむ 勤行（ゴンギョウ）
〔勢〕セイ いきおい 勢子（せこ） 伊勢（いせ）
〔勧〕勸 カン △ケン すすめる

2【勹 部】

〔勺〕シャク △セキ
（勾）コウ まがる 酒勾（さかわ）
（勿）モチ・モツ なかれ・なし 勿忘草（わすれなぐさ）
（匂）におう・におい・におやか
〔匁〕もんめ 五百匁（ゴヒャクめ）
（匆）ソウ いそがしい
〔包〕ホウ つつむ △かね
〔句〕ク 句読（クトウ）
（匈）キョウ 匈奴（キョウド・フンヌ）
〔旬〕ジュン △シュン △とおか
（甸）チン 羅甸（ラテン）
（匍）ホ はう
（芻）→艸部4画
（匐）フク はう

2【匕 部】

（匕）ヒ さじ 匕首（ヒシュ・あいくち）
〔北〕ホク きた △にげる
（匙）シ さじ・しゃじ・かい

2【匚 部】

〔匹〕ヒツ ひき △たぐい
〔区〕區 ク △さかい 区区（クク・まちまち）
〔匠〕ショウ △たくみ
（匡）キョウ ただす
（匣）コウ くしげ 抽匣（ひきだし）
〔医〕醫 イ △いやす・くすし
（匪）ヒ あらず
〔匿〕トク △かくまう △かくす

2【十 部】

〔十〕ジュウ・ジッ と（お） △つづ 十八番（ジュウハチバン・おはこ） 十露盤（ソロバン） 十六夜（いざよい） 二十歳（はたち・はたとせ） 七十（路）（ななそ・ななそぢ）
〔千〕セン ち 千屈菜（みそはぎ）
〔升〕ショウ ます △のぼる
〔午〕ゴ △うま △ひる 午砲（ゴホウ・どん）
（卉）キ くさ
〔半〕ハン なかば △なから 半銭（きなか） 夜半（ヤハン・よわ）
（卍）マン まんじ
〔卒〕ソツ △シュツ △おえる △つい（に） 卒・都（塔）婆（ソトバ） 何卒（なにとぞ）
〔卓〕タク △ショク △すぐれる 卓袱（シッポク） 卓袱台（チャブダイ）
〔協〕キョウ △あわせる
〔直〕→目部3画
〔南〕ナン みなみ 南無（ナム・ナモ） 南瓜（かぼちゃ） 南風（ナンプウ・はえ） 石・南（楠）花（シャクナゲ）
〔卑〕卑 ヒ、いやしい △ひくし
〔真〕→目部5画
〔博〕ハク △ひろい 博士（ハクシ・はかせ） 博奕（バクエキ・バクち） 博多（はかた）
（喪）→口部9画

2【卜 部】

（卜）ボク うらなう・しめる
〔占〕セン、しめる・うらなう △うら
（卦）ケ・カ うらない

2【卩 部】

（卯）ボウ う 卯木（うつぎ）
〔印〕イン しるし △おしで
〔危〕キ、あぶない・あやうい・あやぶむ
〔即〕卽 ソク、△つく △すなわち
〔却〕キャク △しりぞける 却而（かえって）
〔卵〕ラン たまご △かいご
〔卸〕△シャ おろす
（卿）ケイ・キョウ おんみ 公卿（クゲ・クギョウ）

2【厂 部】

〔厄〕ヤク △わざわい
〔反〕→又部2画
〔圧〕壓 アツ △おす △おさえる 押合（おしあい） 圧合（へしあい）
〔灰〕カイ はい 石灰（いしばい・シックイ） 灰汁（あく）
（厖）ボウ おおきい
〔厘〕リン △り
〔厚〕コウ あつい
〔原〕ゲン、はら △（みな）もと △たずねる 河原（かわら）
〔辱〕→寸部7画
（厠）シ かわや 御厠（おかわ）
（厦）カ いえ 〔廈の俗字〕
（厨）チュウ くりや 厨子（ズシ）
（雁）ガン かり
（厩）キュウ うまや
（厭）エン いとう・あきる・いや
〔歴〕歷 レキ △へる
〔暦〕曆 レキ △リャク こよみ
（厲）レイ はげしい
（鴈）ガン かり
（贋）ガン にせ
（厴）エン へた
（靨）→面部14画

2【ム 部】

〔去〕キョ・コ さる △いなす △いぬ 去年（キョネン・こぞ） 帰去来（かえりなんいざ） 過去（カコ）
〔台〕→口部2画
〔参〕參 サン △シン まいる 参差（シンシ） 人参（ニンジン） 海参（いりこ）

2【又 部】

〔又〕△ユウ また 十又五年（ジュウユウゴネン）
（叉）サ・シャ また 叉焼（チャーシュー）
〔及〕及 キュウ △ギュウ およぶ △しく
〔友〕ユウ とも
〔双〕雙 ソウ、ふた △ふたつ △ならぶ 双六（スゴロク）
〔反〕ハン・ホン・タン △ヘン そる △かえる 反故（ホゴ・ホグ・ホウゴ） 反歯（そっぱ） 反吐（ヘド）
〔収〕收 シュウ おさまる
〔叔〕シュク 叔父（おじ） 叔母（おば）
〔取〕シュ とる 相取（かんどり）
〔受〕ジュ △ズ うける
〔叙〕敍 ジョ のべる
（叛）ハン・ホン そむく 謀叛（ムホン）
（叟）ソウ おきな 北叟笑（ほくそえ）む
（叡）エイ・エ あきらか
（叢）ソウ くさむら・むらがる 叢雲（むらくも） 叢雨（むらさめ）

2【⺈ 部】

〔争〕爭 ソウ、あらそう △いかでか
〔危〕→卩部4画
（奐）→大部6画
〔亀〕龜 キ・キュウ かめ・かがまる
〔象〕→豕部5画

3【口 部】

〔口〕コウ・ク くち 一口（ひとより） 口伝（クデン） 口惜（くちお）しい 口説（くど）く
2〔古〕コ ふるい △いにしえ
（叩）コウ たたく
〔只〕シ ただ 只管（ひたすら）
〔史〕シ、△ふみ △ふびと △さかん
（叱）シツ しかる
〔台〕臺 ダイ・タイ △うてな 台詞（せりふ）
〔可〕カ △べし 可笑（おか）しい 可惜（あたら・おしむべし）
〔叮〕テイ 叮嚀（テイネイ）
〔叭〕ハ 喇叭（ラッパ）
〔召〕ショウ めす 召人（めしうど）
（叺）かます
〔司〕シ △つかさ 下司（ゲス）
〔号〕號 ゴウ △コウ △さけぶ 綽号（あだな）
（叶）キョウ かなう
〔右〕ウ・ユウ みぎ 右手（めて） 左右（サユウ・とにかく・とかく）
3（吃）キツ どもる 吃逆（しゃっくり） 吃驚（びっくり）
〔各〕カク おのおの
〔合〕ゴウ・ガッ あう・あわす △かなう 合点（ガッテン） 合戦（カッセン） 合羽（カッパ） 合歓木（ねむのき） 百合（ゆり） 催合（もやい）
〔吉〕キチ・キツ △よし 吉方（えほう）

3【口・口・土】

吉備(きび)　吉利支丹(キリシタン)　住吉(すみのえ・すみよし)
[吊] チョウ　つる・つるす
[名] メイ・ミョウ　な　名残(なごり)
[后] コウ　△きさき△きさい△のち　午后(ゴゴ)
[吏] リ　△つかさ
[吐] ト　はく△つく　反吐(へど)
[向] コウ　むく・むかう　向日葵(ひまわり)　一向(イッコウ・ひたすら)　日向(ひなた・ひゅうが)
[叫] キョウ　さけぶ　雄叫び(おたけび)
[吸] キュウ　すう
(吋) インチ
[同] →冂部4画
4 [君] クン　きみ
(吝) リン　やぶさか・しわい　吝ん坊(けちんぼう)
(呑) ドン　のむ　呑気(ノンキ)　雲呑(ワンタン)
[吟] ギン　△さまよう△うたう△うめく
(吠) ベイ　ほえる　吠陀(ベーダ)　犬吠埼(いぬぼうさき)
[否] ヒ△フ　いな△いや　運否天賦(ウンプテンプ)
[含] ガン　ふくむ　含羞(ガンシュウ・はじらい・はにかみ)　含羞草(おじぎそう)
(吭) コウ　のど・ふえ
[呈] テイ　△しめす

[呉] ゴ　△くれ
(吶) トツ　どもる
[吹] スイ　ふく　吹雪(ふぶき)　吹聴(フイチョウ)
(吻) フン　くちさき
(吼) コウ　ほえる
(呍) ウン
(吽) ウン　阿吽(アウン)
(吾) ゴ　わ(が)・あ・われ　吾妹(わぎも)　嬬吾(つわぶき)
[告] コク△コウ　つげる
(呂) リョ・ロ
(呆) ホウ・ボウ　あきれる・ほうける　呆気(あっけ)
(呎) フィート
5 [周] シュウ、まわり　△めぐる△あまねし　周章てる(あわてる)
(呪) ジュ・シュ　のろう・まじなう
(呱) コ
[味] ミ　あじ・あじわう△み　美味(うまい)　美味しい(おいしい)　不味い(まずい)
(呵) カ　しかる
(呶) ド　かまびすしい
(呷) コウ　あおる
(呻) シン　うめく
[呼] コ　よぶ　嗚呼(ああ)
[命] メイ・ミョウ　いのち△みこと
(咀) ソ　かむ
(咄) トツ　はなし・やあ
(咆) ホウ　ほえる
(咎) キュウ　とがめる

(呟) ゲン　つぶやく
[和] →禾部3画
6 (咤) タ　しかる
(咫) シ　八咫鏡(やたのかがみ)
(咬) コウ　かむ・
(咳) ガイ　せき・せく
(咽) イン、のど・むせぶ　嗚咽(オエツ)
[哀] アイ　あわれ△かなしい
[品] ヒン△ホン　しな
(哄) コウ
(哉) サイ　や・かな　快哉(カイサイ)
[咲] △ショウ　さく△わらう
(呱) →5画
7 [員] イン△エン　△かず
(哥) カ　△あに　哥兄(あにい)　鸚哥(インコ)
(哨) ショウ　みはり　哨吶(チャルメラ)
(哩) マイル
(哮) コウ　たける
(哭) コク　なく
(啄) 啄 タク　ついばむ　啄木(鳥)(きつつき)
8 [哲] テツ　△あきらか
(哺) ホ　はぐくむ
(唄) バイ　うた(う)
[唆] サ　そそのかす
[唇] 脣 シン　くちびる　兎・(欠)唇(いぐち)
[唯] ユイ・イ　△ただ
[唱] ショウ　となえる
(唳) レイ　なく
(唸) テン　うなる
(唾) ダ　つば(き)　固唾(かたず)

[商] ショウ　あきなう　商人(ショウニン・あきうど・あきんど・あきゅうど)
[啓] ケイ　△ひらく△もうす
(啖) タン　くらう
(啜) セツ　すする
(啞) ア　おし
(啀) ガイ　いがむ
[喝] 喝 カツ　△おどす
[問] →門部3画
[堂] →土部8画
9 (啻) シ　ただ(に)
(啼) テイ　なく
(啾) シュウ　なく
(喀) カク　はく
(喃) ナン　のう　喃喃(ナンナン・のうのう)
[善] ゼン　よい　善知鳥(うとう)
(喇) ラツ　喇嘛(ラマ)　喇叭(ラッパ)
(喉) コウ　のど
(喊) カン　さけぶ
(喋) チョウ　しゃべる
(喘) ゼン　あえぐ
(喙) カイ　くちばし
[喚] カン、△よぶ△さけぶ　△おめく△わめく
[喜] キ　よろこぶ
(喧) ケン　やかましい
(喩) ユ　たとえる・さとす
[喫] キツ　△のむ　喫驚(キッキョウ・びっくり)
(喬) キョウ　たかい
(喨) リョウ　ほがらか
[喪] ソウ　も△うしなう△なくす
(喰) サン　はむ・くらう　馬喰(ばくろう)
10 (嗄) サ　かれる・しわかれる　嗄声(しゃがれごえ)

(嗅) キュウ　かぐ
(嗇) ショク　しわい
(嗚) オ　嗚呼(ああ)　嗚咽(オエツ)
(嗜) シ　たしなむ
(嗟) サ　なげく
[嗣] シ　△つぐ
(嗤) シ　わらう
[嘆] 嘆 タン　なげく
(嘩) カ　喧嘩(ケンカ)
11 (嗽) ソウ　(そう)すすぐ・うがい
(嗾) ソウ　けしかける
(嘉) カ　よみす(る)
(嘔) オウ　はく　空嘔(からえずき)
(嘖) サク　かまびすしい
(嘗) ショウ　かつて・なめる　大嘗祭(ダイジョウサイ)　舌嘗(したなめずり)
(嘛) マ　喇嘛(ラマ)
[鳴] →鳥部3画
12 (嘯) ショウ　うそぶく
[嘱] (囑) ショク　△たのむ
(嘲) チョウ　あざける・あざわらう　嘲笑(チョウショウ・あざわらい)
(嘴) シ　くちばし・はし
(嘶) セイ　いななく・いばえる
(噂) ソン　うわさ
(嘸) ブ　さぞ
(噉) タン　くらう
(噌) ソ　味噌(みそ)
(噎) エツ　むせる・むせぶ
(噓) キョ　うそ
[噴] フン　ふく・はく

[器] 器 キ、うつわ　△うつわもの　土器(ドキ・かわらけ)
13 (噤) キン　つぐむ
(噦) エツ・カイ　しゃっくり　噦噫(しゃっくり)　泣噦る(なきじゃくる)
(噯) アイ　いき・おくび　噯気(おくび)
(噬) ゼイ　かむ
(噪) ソウ　さわぐ
(噺) はなし
(嚆) コウ　嚆矢(コウシ)
(嘯) →12画
(嘴) →12画
14 [嚇] カク　△おど(か)す
(嚊) ヒ　かかあ
(嚔) テイ　くしゃみ・くさめ
15 (嚙) ゴウ　かむ・かじる
16 (嚮) キョウ・コウ　さきに・むかう
(嚥) エン　のむ
18 (嚼) シャク　かむ
(囀) テン　さえずる
(囁) ショウ　ささやく
(囂) ゴウ、かし(が)ましい　かまびすしい　喧喧囂囂(ケンケンゴウゴウ)
(囃) ソウ　はやす　囃子(はやし)
(囈) ゲイ　うわごと　囈語(うわごと)
19 (囊) ノウ　ふくろ

3【囗 部】

[囚] シュウ　△とらわれる　囚人(シュウジン・めしゅうど)
[四] シ　よ・よつ・よっつ・よん　四十(路)(よそじ)　四阿(屋)(あずまや)
[回] 囘 カイ・エ、まわす　△かえる△めぐらす　回回教(フイフイキョウ)
[因] イン、よる　△よって△ちなむ
[団] 團 ダン　△まるい　団居(まどい)　団(扇)(うちわ)　団栗(どんぐり)　炭団(たどん)　水団(すいとん)
(囮) カ　おとり
[困] コン　こまる△こうじる
[囲] 圍 イ　かこむ・かこう
[図] 圖 ズ・ト　はかる　図体(ズウタイ)
(囹) レイ　ひとや
[固] コ　かたまる・かたい　△もとより　固唾(かたず)
[国] 國 コク　くに　国栖(くず)
(圃) ホ　はたけ　田圃(デンポ・たんぼ)
(圄) ゴ　ひとや　囹圄(レイゴ)
[圏] 圈 ケン　△はんい△まる
[園] エン　その　祇園(ギオン)

3【土 部】

[土] ド・ト　つち　土産(ドサン・みやげ)　土器(ドキ・かわらけ)　土竜(みみず・もぐら)　土筆(つくし)　土偶(ドグウ・でく)　産土(うぶすな)　唐土(もろこし)　(三)和土(たたき)

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com